

<特集：ツアーで出会う>

参加型学習と学生の学び

—日系ブラジル人の母語保持教室における大学生の交流実践より—

松尾 慎

1. 実践の背景

私は、東京都杉並区にある東京女子大学(1918年設立)に勤務している。同大学は、1学部4学科体制で、どの専攻の学生でも取ることができる日本語教員養成課程、学芸員課程などが存在している。2010年度、私は、日本語教員養成課程の必修科目である「日本語教育研究概論」のほか、「日本語 I (留学生向け日本語科目)」、「日本語技法C(アカデミック・ジャパニーズ)」、社会言語学関係の授業とゼミ、大学院での授業を担当している。本稿では、日本語教員養成課程を受講している者を中心とする学生グループと群馬県太田市在住のブラジル人住民との交流実践における学生の学びに関し報告したい。

従来、そして、現在でも、教育現場には以下の学習観が前提として存在しているのではないだろうか。

- 1) 学習は教室、あるいは図書館、勉強部屋の中で行うものである。
- 2) 学習すべきもの、学ぶべきものは客観的な知識や技術としてあらかじめカリキュラムが作られており、学習者はそれを教師や教科書から学ぶのである。

ブラジルの教育者であるパウロ・フレイレ(1979)は、上述したような教育・学習観を「銀行型教育」と呼び批判している。一方、彼が標榜している「課題提起型教育」では教師と学生、学生相互の対話が教育・学習のあり方の中心に位置付けられている。こうした学習スタイルは一般的に参加型学習と呼ばれている。山西(2005)は「参加型学習とは『学習者の社会参加をねらいとする学習であり、またその参加を可能にするための多様な参加型の方法・手法によって特徴づけられる学習』と定義づけすることができる」(山西2005:18)と述べている。また、レイヴ&ウェンガー(1993)は「学習を内化として見るのとは対照的に、学習を実践共同体への参加

の度合いの増加」(1993:25)とみなしている。実践共同体(community of practice)とは、あるテーマ、仕事(タスク)などに関する関心や問題などを共有し、集団への参加を通して知識と技巧、技術の修得が可能になる社会的実践が繰り広げられる場、人々の集団のことを指している。非常に重要なことは、「実践共同体」という概念の下では、学習とは、個人が知識や技能を習得することではなく、実践共同体への参加を通して得られる役割、アイデンティティの変化や過程そのものであると捉えられることである。

現在の高等教育に求められているのは、既成の知識や技能の受け渡しのみではない。なぜならば、日本や台湾、そして世界の状況を考えれば、社会の多元化や流動性が益々増しており、既存の知識や技能を受身的に身につけるだけでは、こうした社会における実践力、対応力を養うことができないからである。日本語教員養成課程で学ぶ学生に、狭い意味での日本語分析力や日本語教授力だけを教育しても、現場の多様性や流動性に対応し、なおかつ、日本語教育のあるべき行く末をデザインしていく力を養うことはできない。もし、学びの場が「実践共同体」として機能し、社会参加としての実践活動が展開されれば、学生にどのような学びが引き起こされるのであろうか。

本論集の特集テーマは「ツアー」であるが、ツアーは、辞書的な意味で言えば、以下のように定義付けられている。

ツアー【tour】

- 1 周遊。観光旅行。小旅行。「海外」「スキー」
- 2 劇団や楽団、スポーツチームなどの地方巡行。「全国縦断」

(Yahooオンライン辞書より)

このように辞書的な意味では、どこかへ「出掛ける」ことが意味の核になっている。

しかし、私は、ツアーを「実践共同体」としての学びを引き起こす一つ的手段として位置づけたいと思う。その上で、私は、学習、教育的営みとしてのツアーの条件を以下のように考えている。

1. ひと・モノ・コトとの出会いがあること
2. 出会うひと・モノ・コトが予めすべて決められているわけではないこと

3. 問い掛け(省察)があり批判的思考能力を養う場となっていること

上記の3つの条件には、辞書的意味の核になっている外へ「出掛ける」ことが含まれていない。私は、外へ出掛けることがツアーの核となる意味であるとは思っていない。「出掛ける」のは表面化された分かりやすい部分であってその本質ではないと考える。

以下、2章で「実践の概要」、3章で「学生たちの学び」を述べ、4章の「おわりに」で結びとしたい。

2. 実践の概要

本実践は、群馬県太田市の小学校にバイリンガル教員として勤めている坂本裕美さん(日系ブラジル人2世。以下、Hiromiさんとする)、ブラジル人学校教員のColodeti Yokota Silvia Rosaneさん(以下、Silviaさんとする)を中心とするブラジル人住民と本学の日本語教員養成課程を受講している者を中心とする学生グループとの協働実践である。私は1994年から1997年までブラジルで日系人の子どもたちを主な対象とする継承語としての日本語教育に携わる機会を持った。そのときに知り合ったのがHiromiさんである。Hiromiさんはバイリンガル教員を務めながら、同時に、週末に「Vamos Papear(文字通りの意味は、「おしゃべりしましょう)）」という日系ブラジル人の子どもたちを対象とした母語保持教室(ポルトガル語保持教室)をSilviaさんらとともに運営している。Vamos Papearは、2009年2月にHiromiさんの勤務先の保護者会において、母語教室の必要性が意見として出され、早速3月末から活動が開始された。活動場所は太田市の国際交流センターである。参加している子どもたちは約20名で、小学校1年生から中学生まで、幅広い年齢層が参加している。

私は、「日本語教育研究概論」や「3年次演習」において外国につながる子どもたちに対する言語教育や子どもたちを取り巻く環境などに関して、授業で何度となく取り上げている。しかし、外国にルーツを持つ子どもたちの教育問題、母語保持や家庭内コミュニケーションにおける諸問題など学生の想像力を超えた現実に直面し、すべての人にとって公正な社会の実現に向けた実践力を養うためには実際に現場に足を運ぶ必要があると考えていた。こうした理由から、本学学生と太田市在住ブラジル人との交流を始めようとするに至った。そこで、Hiromiさんと連絡を取り合い、筆者の学生とVamos Papearで学ぶ子どもたち、保護者、そして、学校教育関係者との交流を始めることとした。2010年12月現在、本学のメンバーは、大

学院生から学部1年生まで多岐に渡っている。「日本語教育研究概論」は2年生向け授業であるが、上級生の中にはこの授業を受講した学生、受講している学生が少なくない。また1年生は、私が所属する言語科学専攻の1年次合宿において、ゲストとして登場してくれたHiromiさん、Silviaさんに出会い、何かに惹き込まれるようにこの実践に参加するようになった。この実践活動は、サークル活動ではないし、授業の一環でもないで、出入りは自由であるが、25名前後の学生が関わっており、うち数名の学生が核となって活動している。

初めての交流実践は、2009年10月31日に行われたので、2010年12月現在で、1年以上経過している。現在まで、約10回の実践交流が行われた。活動の柱となっているのは「Vamos Papearへの訪問」である。この他に、「ブラジル人家庭でのホームステイ」、「ブラジル移動領事館でのボランティア」、「ばずる通信(日本語とポルトガル語で併記された通信)の発行」、「フェスタ・ジュニーナ(収穫祭)への参加」などが活動内容として挙げられる。「Vamos Papearへの訪問」は、活動の柱ではあるものの、学生たちはポルトガル語をほとんど理解しない。こうした学生たちが、どのようにVamos Papearに貢献できるか、それは2010年12月現在に到るまで大きな課題となっている。この課題を克服するために、2010年10月の訪問から絵本の読み聞かせを始めた。学生が予め絵本を選んで、その内容をHiromiさんに伝えておく。当日は、学生が日本語で絵本を読み聞かせ、その内容に沿って、太田の学習支援者がポルトガル語でフォローしていく体制が取られている。12月18日の活動まで、4回の読み聞かせを行った。絵本をかぶりつように見る子どももいる。また、2010年12月20日時点の最新企画は、2011年3月6日に太田市で開かれる外国人スピーチコンテストに4,5名の子どもたちが参加するにあたり、原稿制作段階から学生が子どもたちとペアを組んで、一緒にスピーチを作り上げていくというものである。この企画はHiromiさんから投げかけられた企画である。その企画を東京女子大学に持ち帰り、私、そして、学生との話し合いを経て、実現に向けて動き始めている。今後も、学生たち自身で自分たちに何ができるのか考えたり、太田の仲間たちや私からの提案などを取り入れたりして、様々な企画を立て、また、実行していくものと考えられる。

ブラジル人家庭でのホームステイも2回、実施された。日本において外国につながりを持つ家庭に日本生まれの日本人の学生がホームステイをするというのは一見、逆転した現象に思えるが、それこそがこの活動の狙いでもある。ブラジル移動領事館とは、簡単に言えば、出前領事館である。東京にブラジルの領事館が存在するが、地方在住のブラジル人たちにとって

平日に東京まで行くのは仕事上も経済上も容易ではない。そのため定期的にブラジル人集住地で移動領事館が開かれ、パスポートの延長や出生届、婚姻届などの手続きを行っているのである。その移動領事館で本学の学生は、案内業務、データ入力業務、コピー取りなどでボランティアを行った。「ばずる通信」の主な読者は東京女子大学の学生を中心とする日本人住民である。本実践の紹介や太田市在住のブラジル人の仲間の声を日本語とポルトガル語の両言語併記で記事にしている。今後は、ブラジル人住民にとっても興味を持てる内容にしていくべく様々な企画を学生が考えている。フェスタ・ジュニーナは、ブラジルの各地域で行われている収穫祭である。田舎っぽい衣装を作って、楽しく踊り、語り合う祭りである。日本在住のブラジル人コミュニティにとって、親交を深め合う貴重な機会となっている。この祭りに学生たちは積極的に関わった。踊りの練習や衣装作りのために太田市を訪れ、本学でも衣装作りや踊りの練習を行い、2010年6月20日の本番を迎えた。これらのすべての活動に共通しているのは、活動の締めくりに「振り返り」の時間を設けていることである。この振り返りが実践活動の中で占める位置は高い。この点に関しては、学生の学びに直結するので次章で改めて述べたいと思う。

3. 学生たちの学び

本章では、この交流実践に関わっている学生たちの学びに関し、述べるとともに、コーディネーター、ファシリテーターとしての私¹が、どのように活動に関わってきたかに関しても触れていくこととしたい。学生の学びに関しては、学生が活動後に書いた「振り返り」やメーリングリストへの投稿に基づいて分析していきたい。本実践では、活動毎に必ず振り返りを行っている。しかも、複数回に渡って行っている。Vamos Papearの授業が終わった直後、太田側の学習支援者と学生との振り返りがあり、大学でまたミーティングを開き、活動に参加した学生だけではなく参加しなかった学生も含めての振り返りを行う。さらには、メーリングリスト上に振り返りを投稿する学生も少なくない。「振り返り」ということばは日常的な用語であるようで、実はピンと来ないことばでもある。実践における振り返りは、考えたことや感じたことをアウトプットすること(外化)である。振り返りは、口頭であれ文字上であれ、自分が感じたことを説明しなければならぬので、少し上から自分を眺める必要が生じる。アウトプットされることによって、メンバー全員で共有し、相互にコメントしたり、議論をしたりすることができる。そこから、次の課題や目標の設定が生まれるのである。メンバーの学生の一人が「振り返りは反省会じゃないですよ」と語

っているが、まさにその通りであり、前向きな姿勢で行うのが振り返りである。本章では、振り返りのうち学生がMLに発信した内容を中心に上げたいと思う。なお、1年以上に渡るすべての活動、振り返りを取り上げることはできないので、「ばずる通信」を取り上げて、学生の学びを考察していきたい。「ばずる通信」を取り上げるのは、この活動がVamos Papearへの訪問と並んで継続的に実施されている活動であり、学生の学びの足跡を辿るために適切であると考えられるからである。考察にあたっては、発行にいたる過程を中心に上げるとともに、記事の内容に関連して、学生が「実践共同体」における活動の中で、自らの役割やアイデンティティをどのように変化させていったのか、その経緯を考察したい。

3.1. 第1号 - 「困っている人」としての「彼ら／彼女ら」 -

2009年12月のホームステイに参加した学生に対し、こうした実践活動のことやブラジル人住民の声を伝えるフリーペーパー(通信)を作ったらどうかと私が持ちかけたところ、多くの学生が是非作りたいとの意思を表明し、それならば、組織を作った方がいいのではないかという声が学生から上がった。それをきっかけにして発行されることになったのが「ばずる通信」である。以下、「ばずる通信」をめぐる学生たちの学びに関し述べていきたい。

2010年2月5日、つまり2学期の期末試験が終了した直後に、会議が開かれた。会議では読者対象や記事の内容、グループ名、通信の名前などが話し合われ、通信は、日本語とポルトガル語の2言語併記とすること、組織の名前は「ばずる」とすること、「ばずる」が作成する通信なので通信名は「ばずる通信」とすることなどが決まった。また、記事の内容も大まかに決められた。しかし、細部に関しては、結論を出すには至らず、3月15日に再び話し合うことになった。2010年4月の新学期に第一号(ピース1)を間に合わせるべく、3月26日に集まって、記事の作成を行うことが決まり、記事の内容の細部に関しては、26日まで、メーリングリスト上で議論することになった。記事に関する議論の中で、「ばずる通信」を発行する目的に関し、度重なる議論がメーリングリスト上、そして、会議の席上で重ねられたので紹介したい。

まず、Yが、以下のような文を起草した。

こんにちは。私たちは「ばずる」です。ばずるとは、たくさんのピース(号)をつなぎながら、英語の'puzzle'にちなんで、明るい部分だけでなく、あらゆる状況の中で困っている人たちの

声も届けていこうという意味で付けられた、東京女子大学の学生を中心としたグループです。日本社会において多様な背景を持つ人々が、お互いに知り合うことを目的として、『ばずる通信』を作りました。(下線は松尾による)

議論になったのは下線部である。私たちは太田の仲間(ブラジル人住民)のことを「困っている人たち」と見て交流しているのか、という問いかけが一部の学生、そして、私から発せられた。

Yの提案を受け、学生Nは以下の記事内容を提案した。

こんにちは。私たちは「ばずる」です。ばずるとは、たくさんの様々なピースが合わさって一枚の絵が出来るという意味で付けられた、東京女子大学の学生を中心としたグループです。日本社会において多様な背景を持つ人々が、お互いに知り合うことを目的として、『ばずる通信』を作りました。たくさんのピース(号)をつないでいけたらいいなと思っています。

Nの提案からは「困っている人たち」が消えている。大学院生であるNは居住している地域で、日本語学習支援のボランティアとして活動している。Nの考え方は、こうした地域活動における活動内容、活動を支えている信念からきたものであろう。つまり、自分自身が学習支援をしている子どもたちを「困っている人」として捉えるのではなく、同じ目線で接しているという意識を持っているものと思われる。しかし、議論には揺り戻しがあり、学生Tは、以下の通り発信している。

うーん…。私は最初のうちにばずるの2つの意味を提示しておいたほうが良いと思います。①さまざまなピースが合わさってつなぎ合わせていき、1つになるという点。②もうひとつの意味、日本社会で生きていく上で表面上はなかなか見えてこないけど困っている人がいる。②の点は、Xさんの話に絡んでくるのではないかとと思います。(下線は松尾による)

Xさんとは、太田在住のブラジル人で、「ばずる通信」の第1号の記事として、日本での生活

に関する記事を書いてくれた方である。Xさんは、2008年のリーマンショックによる経済不況の影響で職を失った。まさにXさんは「困っている」わけで、そういう現実を知りYやTは、東京女子大学の友だちや知り合いに、そうした状況を伝えていきたい、と使命感を持って考えたのであろう。現実には、Tの発信を受けてYは再び、以下の通りメーリングリストで発信している。

こんにちは。私たちは「ぱずる」です。ぱずるとは、たくさんのピース(号)をつなぎながら、英語の'puzzle'にちなんで、明るい部分だけでなく、あらゆる状況の中で困っている人たちの声も届けていこうという意味で付けられた、東京女子大学の学生を中心としたグループです。日本社会において多様な背景を持つ人々が、お互いに知り合うことを目的として、『ぱずる通信』を作りました。

私が「困っている」という表現をしたのは、困っている人たちが太田市の人々だとは限定していないからです。境界線を付ける意味ではなく、あくまでもみんな困っていることがあるはずだし、太田市に住む方々や、ぱずるのメンバーにも「日本に住んでいる」という共通点はあるけれど、皆それぞれ様々な背景を持って生きてきたはずで、その中で、個々が持つ大変な状況をみんなで共有し、知らなかった人には知るチャンスを持ってもらい、知っている人には、自分は何ができるかを考えてもらうきっかけを作ることができたらいいなと思い、「困っている」という表現をしました。

このようにYは「困っている」という表現に関し、意図を説明している。Xさんばかりではなく、太田在住のブラジル人の中には経済不況で職を失った人が少なくないこと、その影響でブラジル人学校をやめなければならなくなっている子どもがいること、自宅や車を購入したもののそのローンが支払えなくなっている家族があることなどをホームステイの際に知り、「困っている」ということばに拘ったのであろう。学生の真摯な思いは十分に伝わってくるのだが、「あらゆる状況の中で困っている人たちの声も届けていこう」という文面からは、やはり、東京女子大学の自分たちは、声を届けていく役であり、「困っている人」たちが他者として対象化されていると認めざるをえない。このあたりが2010年3月末時点での活動の立っている位置であったのである。結局、メーリングリスト上では結論が出ず、3月26日の記事作成の日までこの表現に関しては持ち越された。しかし、実は、26日の会議の直前に、学生が書いた日本語の記事をポルト

ガル語に翻訳する作業をしてくれたHiromiさんより東京女子大学のメンバーに対してかなりの衝撃をもたらす以下のメールが発信された。

フリーペーパーの読者はだれでしょう。

だれに書いているのかが、見えてこないです。

日本人の方々に読んでいただくものであれば、バイリンガルにする必要はないのではないのでしょうか。今の内容を見てみますと、ポルトガル語に翻訳する必要があるのかと疑問に思ってしまう。母語教室の参加者は興味を持って読むでしょうが、では、その他のブラジル人にとってはどうでしょう。

このへんをもう一度皆さんに考えていただきたいと思います。

せっかく作成されるのであれば、皆に読んでいただきたいと思います。

問題は「困っている人」という表現だけではなく、そもそも、この通信が誰に向けて作られるものなのかが問われたのである。「多様な背景を持つ人々が、お互いに知り合うことを目的として、『ぱずる通信』を作りました」と記事に書いたとしても、記事の内容が誰に向けて書かれているのかよく分からないという印象をHiromiさんは持ったのである。つまり、

- 1) 「私たち」は誰なのか。東京女子大学の学生グループなのか。それとも、「私たち」にはHiromiさんやその他の太田のメンバーも含まれているのか。
- 2) 「私たち」は誰に向けて通信を作成しているのか

など、私たちの立ち位置が様々な点で非常に曖昧な内容になっていることが指摘されたのである。こうした指摘を受けて26日の記事作成、そして、そのための会議は行われた。26日は午前10時頃に集合し、「ぱずる通信」の発行の目的に関する記事に関し、延々と議論された。論点は「困っている人たち」をどうするのか、「ぱずる」というグループをどのように説明するのか、さらには、通信は誰に向けて作られているのかなどであった。午前中の2時間は、ほぼ「困っている人たち」に関する議論に終始し、発行の目的に関し、最終的にまとまったのが以下の内容である。

こんにちは。私たちは「ぱずる」という東京女子大学の学生グループです。日本社会において多様な背景を持つ人々が、お互いに知り合うことを目的として、『ぱずる通信』を作りました。

わずか数行の内容のために、メーリングリスト上で、10日間あまり議論し、しかも、会議の席上で2時間も議論するという経験は学生にとって未知の体験であったようだ。結局、通信を仕上げる具体的な作業に関しては、4月2日に行うこととなり解散した。26日の議論は、学びも大きかったであろうが、疲れも相当のものであったようである。また、議論を自身で咀嚼することも容易ではなかったことは、26日の議論に関して、誰からもメーリングリスト上に発信がなかったことから窺える。発行の目的的部分をどう書くのか、一応は、結論をみたものの、メンバー全員の心にストンと落ちたわけではなかったのかもしれない。4月2日の作業でも記事は完成せず、最終作業は6日に行われることになった。2日の作業が終わった後、Nがメーリングリストに以下のように発信した。本節のサブタイトルである「『困っている人』としての『彼ら／彼女ら』」とは直接は関係がないが、次節の内容に深く関わってくる内容であるため発信内容を記したい。

「ところで今日は全ての原稿を私が預かって帰りました。表面右側の私の記事の記入があったからですが、他の原稿はできれば学生のみなさんで持ち帰ってほしかったです。受け取ってしまった私もまずいのですが。フリーペーパーを作るのは誰なのか、今一度自分の心で確かめて下さいね」。

Nは大学院生でもあり、こうした通信を制作した経験も豊富なので、他の学生から頼られる存在となっていた。この傾向は8月に第2号、11月に第3号が発行されるに至るまで基本的に続いているのであるが、創刊号の発行の時点で、その芽が生まれていたことが分かる。熱意と意思があっても、なかなか思うようにいかない、それが、こうした活動の特徴なのであろう。一気に歩みを進めることはできず、三步進んで、二歩下がる、しかし、確実に一步は進んだ、というあり方で踏ん張っていかなければ、こうした活動は継続していかないものと思われる。

ともかく、2010年の4月の新学期に間に合うように「ぱずる通信」という日本語とポルトガル

語の両言語併記の通信の創刊号を発行することができた。「ばずる通信」第一号(ピース1)は、B4の裏表一枚という内容ではあるが、Vamos Papearへの訪問記、ホームステイ体験談、移動領事館に関し、そして、2名のブラジル人住民の声が掲載されている。東京女子大学の学内で数百部、さらに、こうした実践に興味、関心を寄せてくれる大学外部の方々にも数十部配布した。読者からの感想も寄せられ私のホームページに掲載されている²。

1章で、『実践共同体』という概念の下では、学習とは、個人が知識や技能を習得することではなく、実践共同体への参加を通して得られる役割、アイデンティティの変化や過程そのものであると捉えられることである」と述べた。この観点に照らせば、「ばずる通信」第1号の時点では、学生の多くは、ホームステイなどの活動を通して知り得た「他者」の現状を、広く社会に伝えていくという伝達者としての役割、アイデンティティに立脚していたといえるだろう。つまり、東京女子大学のグループにとって、活動を共にしている太田のブラジル人たちは、同じ実践共同体の成員であるというよりも、社会に対して代弁者としてその声を「届けてあげたい」対象、何らかの方法で「助けてあげたい」対象であったといえるだろう。

3.2. 第2号 — 「私たち」が「一つのチーム」になるために—

第2号は、6月20日に参加したフェスタ・ジュニーナに関する記事を中心として編集された。その他に、太田市の隣町の大泉町にあるブラジルスーパーに行った印象が深かったとのことで、ブラジルスーパーに関する記事も内容として取り上げられた。さらには、第1号を読んだ感想を寄せてくれた読者の声も一部、掲載した³。また、第2号の特徴として挙げられるのは、義務として「ばずる通信」を発行したという点である。義務というのは、「ばずる」の学生たちが、グループとして学内の「学生研究奨励費」というグループ研究奨励費を受給することになったためである。応募の際に、「ばずる通信」を発行することを記したため、大学に対する「義務」として通信を作成する必要性が生じた。それが思わぬ問題を引き起こすことになるとは想像出来ていなかった。

学生研究奨励費の研究計画書には、「ばずる通信」の発行を7月と明記してあった。フェスタ・ジュニーナは6月20日なのだから、7月中に記事を完成し発行することは十分に可能であろうと皆、考えていたと思う。7月3日に、「ばずる通信」第2号の内容、そして、「ばずる」の活動とは何なのだろうか、という話し合いを8名で行った。「ばずる通信」に関しては、私のホームペ

ージに載せられた会議記録には以下の通り掲載されている(<http://www.lab.twcu.ac.jp/shin/ota/2010/7.03.htm>)。

ばずる通信1のとき…「パズル通信は何のためのものなのか分からない」という指摘を受けて悩む→「みんなに声を届ける」こと(東女学生、太田の学校、太田の住民、飲食店への配布)を目指した

↓

今回はどういう思いを伝えるのか。

私たちや、読者の感じたことを太田に、太田のことをみんなに、双方向に届けるものになりたい

第1号の発行の際に、Hiromiさんから受けた指摘に基づいた話し合いが行われたことが分かる。しかしながら、会議記録からは、「ばずる通信」が「何のため」に発行されるのかに関する答えは掲載されていない。一つ言えるのは、学生にとっては大きな学びの場となっているということだ。しかし、それが学生の学びの場としてだけに収斂してしまうのでは、発行の意義が根本的に問い直されることになってしまう。第2号でどれだけ「何のために」について回答できるのか、そこが問われる編集作業となること、それをどれだけの学生がこの時点で共有できていたのかは分からない。

結果として、第2号は、7月中に完成させることができず、完成は8月11日に持ち越されてしまった。以下、学生によるメーリングリストへの投稿に基づいて考察していくこととする。なお、各投稿に関しては、私の判断で、本稿の考察に関係する部分のみを取り上げることとする。

8月4日の発信(学生H)

私自身、何を求められてるのかわからないままあいまいにして進めてしまいました。

(後輩の)Iちゃんはちゃんと原稿案を送ってくれたのですが、私が読んでコメントするのが遅くなってしまったりして…。今思うともっと早くヘルプをだすべきでした。いまさらになってみなさんにご迷惑をおかけすること、申し訳なく思います。責任を果たせなくてすみません。

学生研究奨励費研究に提出した計画書の履行に向けて、ぱずるのメンバーのほぼ全員が「ぱずる通信」の第2号に関わることになった。その中には第1号には関わっていない新規メンバーも多数存在しており「ぱずる通信」に対する思いや「ぱずる通信」の課題の共有など、様々な点に関し、学生間で大きな相違が存在したまま編集作業を開始してしまったことが大きな問題点であったと思われる。7月3日の話し合いの参加者は私を含めて8名であり、「ぱずる通信」の第2号に関わる学生の約半数しか参加していなかったのである。

8月5日の発信(学生N)

見てないかもしれないけど。。。

今日はEさんとふたりで、ぱずるの作業をしました。裏面の写真を添付しました。8割方出来上がっていますよ。

ところでみなさんは、ぱずる通信をいつまでに完成させるつもりでしょうか。研究費の計画書には7月と書いているので、もう先延ばしにはできないですよ。こういうことは初めての人ばかりだったので仕方ないといえば仕方ないのですが、それにしても前回の倍以上の時間がかかっています(前回も私以外みんな未経験でした)。

しのごの言わずにまず文章を出してみる、書いてみる。それでないと、直すこともできません。それから「私にはできない」とか、疑問がわいた時、その時のためのメーリスだと思います。必要十分な連絡を密に取り合いたかったですね。

私から提案です。

- ①今回の「ぱずる通信」作成の過程をふりかえる機会を作る
- ②ぱずるのメンバーで集まる曜日を固定する

大学院生であるNは、私に「自分は中間管理職みたいだっと思っています」と話したことがある。私は大きな意味でのコーディネーションはするが、活動の個々の諸相に関しては、見守ることを原則としている。人生経験、社会経験、活動経験、通信作り経験など、多くの側面で一般学生より経験で優っているNに掛かる負担は少なくない。「見てないかもしれないけど」という冒頭の一文にその困惑と苦悩が窺える。Hの発信にある「今思うともっと早くヘルプをだすべきでした」に応じて、メーリングリストの有効活用を訴えているが、ある種の責任感から「ヘルプ」が出

せないグループにとどまっている「ばずる」の実情がここに浮かび上がっているのである。注目したいのは、Nが振り返りの提案を行っていることである。こうした厳しい状況だからこそその振り返りの提案であり、ここに後ろ向きではない未来指向の課題設定と解決の糸口の希望が見いだせる。

8月6日の発信(学生Y)

Nさんのご指摘通り、今回はかなり時間がかかってしまいましたね。

人数が多かったのになぜ？逆に人数が多かったから？テスト前だったから？

色々考えられますが、反省点があっても無くても私たちの活動理念として、どっちみち振り返りの時間が必要だと思います。

「ばずる」のリーダーであるYはNの発信に素早くレスをしている。Yもまた振り返りの大切さを十分に認識している。

8月7日の発信(学生Rの発信)

ばずる通信の作成に時間がかかってしまったこと、なかなか動きだせなかったこと、私も自分自身に問いかけています。振り返りは打上げの日に、ということですが私は参加できないので、皆で振り返りの機会を持たなければ自分なりに思いついたことを投げかけようと思っています。

明日の作業も全く参加できず、心苦しいです。今回のばずる通信、私自身は頑張りどころと楽しみどころのバランスがうまく取れなかった気がしています。チームワークについても難しく考えてしまって、フットワークが重くなってしまいました。でも、完成間近の今はとってもウキウキしてますよ！

RもHが「ヘルプ」という発信ができなかったのと同じように、十分な貢献ができなかったこと、「チームワーク」を「難しく考えてしまって」十全なコミュニケーションができなかったことなどを反省している。とりわけ重要なのはチームワークを難しく考えてしまう、というグループの状

態である。第1号の際に、東京女子大学の「私たち」が太田のブラジル人住民を他者として捉えている部分があるのではないかと論じたが、そもそも、東京女子大学のグループのメンバー自体、本当の意味で「私たち」になっているのか、それ自体が問われた第2号の発行となったのである。

8月13日の発信(学生N)

【次号ばずる通信に向けて】NHさん、KAさん、松尾先生とNで、簡単に振り返りをしました。

- ★ 代表のYさんとは別に、編集の責任者を決める。
- ★ 原稿の締め切りをきっちり決める。翻訳依頼も締め切りを提示して依頼する。
- ★ ばずる通信作製をやりたい学生で、進める。
- ★ 全体を見渡した時どうなるか、思いを「共有」できていると、編集上細分化して作業しても何とかなる。

書けない、できない、しんどい、と思ったら、できるだけ早くそれをここ(メーリングリスト)で流してほしいです。忙しいのはみんな同じ、だけど、声を上げないとそれも伝わりません。ひとりで作っているのではなく、みんなで作っているのだから、声を上げてほしいです。

「私たち」「ばずる」は、活動に対する思いも、活動に当たられる時間や余裕も学生によって様々である。「ばずる」は授業活動の一環でもないし、正式な部活動、サークルでもない。入部届けも休部届けも退部届けも必要ない緩やかに結びついている集団である。また、どの学年が執行部というわけでもない。そうした集団である以上、各々の関わり方を最大限尊重していかなくては成り立たないグループである。また、自身の関わり方は自身で決めることが原則となる以上は、自身の思いは、各自が声を上げていかなくてはグループとしての活動が成立していかないことを「ばずる通信」第2号の編集作業を通して学ぶことができたのではなからうか。ということ踏まえ、私は会議において「やりたい学生」で作業を進めるという提案をした。学生もまた、その方がよい、という見解を持っていたようである。原則的に、活動の方向性を大きく左右する発言を私はしないようにしている。しかし、ここでは私はかなり大きい提案を行った。このあたりコーディネーター、ファシリテーターとしての教師がどの程度、方向性に関与するべきであるのか意見が分かれるところであると思われるが、無策が最良の策であるとも思えない。

自身の経験値を学生の実践に有効に活用していくことは介入というよりはリソースの提供であると考えたい。

以下のRの発信は、「私たち」が私たちであるために何が必要であるのか、自身の声を伝えている。

8月13日の発信(学生R)

私は今回の編集作業で、チームワークについて学びました。

当初は人数が多いほど、作業を振り分けて機能的に進めていけるかと思っていましたが、実際は大勢の中で、自分が何を求められているか、何がしたいのか、何ができるのか、見失ってしまい手がつけられませんでした。もっと早くにすればよかったかもしれません。

正直、色々なことがしんどくて編集に関わる余裕がないと思ったことがありました。

そのときは「できない、ヘルプ！」の意思表示をする勇気もなく、結局ずるずると締切日を伸ばすことに甘んじてしまいました。そして後ろめたさが増していくという悪循環でした。無責任に放り投げるのではなく、できないときは仲間を信頼して任せること、それを言い出す勇気を持ちたいと思います。私たちは一つのチームなのだ改めて感じています。

伝え合う「勇気」を持つこと、それが「私たち」が「一つのチーム」になっていく鍵であること、それをRは伝えているのである。

実践共同体における学びを考えたとき、「ばずる通信」第2号作成を通して「ばずる」が得た学びは、「私たち」は私たちであると当然のように考えていた前提が軋み始めたこと、そして、こうした困難を経て、「一つのチーム」になるとはどのようなことなのか、それを実践、振り返りを通して考えたことの中にある。各成員がそれぞれの「ばずる」との関わり、「ばずる」における役割を考え、その立場は異なっても、伝え合うことによって「一つのチーム」というアイデンティティを持ち得るのだということ、それを学んだのではなからうか。第1号作成の際、Hiromiさんから投げかけられたことば、「だれに書いているのかが、見えてこないです」は実は、東京女子大学のグループ自体が「だれ」なのか「見えてこない」という問いかけでもあったのだろう。そう考えれば、第2号を通して、「私たち」自身が「だれ」であるのか、つまり、どのようなチームであるのか、それが「私たち」自身に問われたというのは必然であったようにも思え

る。完全な答えはまだ見えてはいない。パズルは簡単には解けないのである。

3.3. 第3号—ぐっと近く、名前を呼び合える関係—

8月13日のNの発信内容にあるように、第3号の編集は、「やりたい学生」を募って行うこととなった。また、第2号と同じく、学生研究奨励費の計画に第3号の発行を記したため、発行は義務的なものでもあった。11月13日に学園祭(VERA祭)で、この活動に関し、ゼミ発表という枠で発表することとなり、その際に、第3号を配布できるように間に合わせようという目標が設定された。第3号の編集に関しては、学園祭という明確な締切りが設定されていたこと、そして、編集を希望者にしたこと、この二点の理由で比較的スムーズに進行していった。また、第2号の振り返りでNが発信した「全体を見渡した時どうなるか、思いを『共有』できていると、編集上細分化して作業しても何とかなる」が編集ミーティングの際に、徹底された。ホワイトボードに、記事全体のレイアウトを書き込み、通信の全体像を全員で共有し、自分の担当記事が通信全体の中で、どのような位置を占めるのか、空間的にも内容的にも把握していった。

編集作業がある程度、順調に進んだ大きな背景として、10月8日に行われたミーティングとそこで話し合われたこと、合意されたことが挙げられる。まずは、そこから述べていきたい。10月1日に少人数でミーティングを開いた際に、私がある提案をした。それは、一度、全員に招集を掛けること、今後の関わり方に関して述べてもらうこと、述べてもらう際には普段、どのような日常を過ごしているのか話してもらい皆で共有していくことなどであった。この提案は、メンバーのふるい落としのためではなく、互いが互いの事情を知った上で、その関わり方を尊重していくことから、グループのまとまりが高まっていくだろうとの考えで行った。先にも書いたが、この活動はもちろん授業でもなければ、正式な部活動でもサークルでもないの、拘束力はあまりない。ないのはいいのだが、互いの事情を知らずに、「すみません。ちょっと用事で今度の会議出られません」、「すみません、サークルの練習があって…」と発信されるメールを見ても、無力感を感じるだけであった。その場にいたメンバーは私の提案を受け入れ、Yが以下のような発信を行った。

10月8日(金)お昼休みに集まります。

【話し合う内容】

- ・ 関わり方の確認（今誰がどのぐらい活動に関われるのか、メンバーのみんなはどんな活動をしているのかを一度きちんと共有しましょう！）
- ・ 学生研究奨励費について（申請書に名前を載せるか。また、テーマを少し変えて申請すれば、余分に交通費がもらえるかもしれません。）

いつもは強制で集まることは絶対にしていませんが、今回はよっぽどのことがない限り来るようにしてください！場所は23号館5階の談話室です。後期の活動に向けて、個々の関わり方の確認をしたいですね。

来られる方も来られない方も必ずこのメールに返信してくださいね♪

このメールに答えて、8日の会議は18名ものメンバーが集まった。これほど多くのメンバーが一同に介したのは初めてである。会議では、一人一人が現在の自分の学生生活の状況などに関し、みんなに伝えていった。実はメンバーの多くは、「ぱずる」の他に正式な部活動やサークル活動に参加している。しかし、各々がどのような活動をしているのか、どの程度、練習や集まりがあって、試合や発表会がいつ頃にあるのかなど、ほとんど共有していなかった。一人一人が発表していき、例えば、あるダンスサークルに参加している学生は、12月初旬に公演会があり、2学期は毎週末のように練習が入るため太田へ行くことが難しい、という事情を話した。このような事情を共有することで、メンバー一人一人への関心が高まったことは間違いない。また、ある学生は、「ぱずる」以外にも色々な活動をしているし、勉強もあり、毎日のように誰かが発信しているメーリングリストをチェックしなければならないと思うと精神的につらい、という心境を吐露した。私はこの発言を拾って、週に1回、これだけ読めば、現在の「ぱずる」の状況が分かる週報のようなものを出したらどうかと提案した。学生中心の活動ではあるが、実践の中ではしごの掛け役もまたコーディネーターとしての教師の役割の一つであるといえるだろう。この提案が受け入れられ、毎週、金曜日にミーティングを行って、その結果を週報に載せることになった。第一号の週報が翌週、発行された。以下、関わり方の確認の部分から抜粋する。

① 関わり方の確認について

今誰がどのぐらい活動に関われるのか、メンバーのみんなはどんな活動をしているのかを確認しました。みんなそれぞれ太田以外に活動をしているので、それをお互い知るといって

は今後の活動を続けていく上で大切なことだったと思います♪個人情報満載だったので(笑)一人ひとりの状況を書くことはしませんが、メンバーのみんなのことを心に留めておいてください!

書かれているとおり、メンバー一人一人のことを互いに心に留めることから、「私たち」は一つのチームとしての力を得ていくことができるのであろう。第3号は、こうした「ばずる」における新たな流れを背景に編集作業を進めていった。

第3号に関しては、記事の内容を柱に考察していく。結果として、どのような背景の中で編集作業が進んでいったかが明らかになるものと思われる。取り上げるのは3つの記事である。一つ目は「お互いのなまえを覚えよう!」、二つ目は「バーベキューの思い出をVamos Ppearの子どもたちに聞きました」、最後は「BBQ&保護者会に行きました」である。

「お互いのなまえを覚えよう!」は8月21日の教室訪問の際に、子どもたちの名前を覚え、なおかつ自分たちの名前を覚えてもらうための活動を行った模様を紹介した記事である。胸に貼れるネームシールを利用して互いの名前を覚えることを私が提案したのである。その提案を学生はゲーム活動に取り入れて、楽しい活動に落としこんでいった。このあたりの事情が記事に書かれている。

これまで、私たちは教室の子どもたちと交流を重ねてきたにも関わらず、個人名を呼び合うということがほとんどないことに気付きました。子どもたちにとっても私たちの存在は「東京から来る皆さん」という一括りになっていたようです。そこで、交流の原点とも言える「互いの名前を覚える」に焦点を当てて、服に名前シールを貼ることに加え、名前を覚えるためのゲーム活動をしようということになりました。

活動を通してみんなの名前を覚えることで、お互いを名前で呼び合える関係になり、距離がぐっと近くなりました。その後の振り返りでも、「あの髪の毛の長い子…」などの抽象的な表現でなく、「○○ちゃん」と個人の顔を思い浮かべながら話すことができたのでより濃いものとなりました。この活動でこれまでの「Vamos Ppearの子どもたち」「東京から来た皆さん」というあいまいな認識から親密さを増した関係になれたと思います。相手の名前を覚えることは交流する上で大切なプロセスだったのですね!

名前を呼び合える関係になれたことで距離感が近くなり、まさに顔が見える関係になれたことが実感を持って表現されている。これまでも顔は見えていたけれども、個々の子どもたちを見ていたのではなく、見ていたのは「Vamos Papearの子どもたち」であり、私たちもまた「東京から来た皆さん」と見られていたことになる。名前を覚えることによる関係性の変化が、他の記事にも表れた。それが「バーベキューの思い出をVamos Papearの子どもたちに聞きました」という記事である。これは、子どもたちに手書きで記事を書いてもらい、それを「ばずる」のメンバーが切り貼りして編集するという協働作業であった。4人の子どもたちが、日本語とポルトガル語でバーベキューの思い出に関して書いてくれた⁴。第1号、第2号の記事の多くは、学生の思い、振り返りを伝える内容が中心であったが、第3号のこの記事は、太田の仲間、さらには子どもたちと協働して作り上げていくという通信の新たな可能性を感じさせるものとなった。以下、この記事が掲載されることになった経緯をメーリングリストでのやり取りを基軸に振り返りたい。

もともとこの企画は、HiromiさんがYに私信で宛てた以下の内容のメールから始まった。

Yさん、3号の作成をスタートすることを書いていましたが、今回少し、進化させてみたらどうでしょうか。

こちらでは、高学年、または、中学生がどう参加していけばいいのか考えているところです。中学校に行けば、部活があったり、高学年になって、ポルトガル語学習だけでは、物足りないところがあると思います。リーダー的存在、または自分の意見を持って、伝えられる子を育てていかなければとずっと思ってきました。そのためにはどうしたら、いいか、模索中です。

ばずるは、学生の活動ですが、一つ思いついたのは、協働でばずるを作成できないかということです。学生さんが、大学の方で、分からないことについて書くというのは、とても難しいことだと思います。そこで、子どもたちとのやり取り中、生まれてくることがあるではないかと思います。子供たちにも、いい刺激になるとと思います。

内容自体は、こちらに来たときに話し合っ、そちらで作業をすると言うのでは、少し、学生の負担が、減少するのではないかと思います。子供たちが関わってくることによって、こちらの読み方、読み取り方も変わってくると思います。

もっとややこしくなると感じられるかもしれないが、もっと、活動を広げるきっかけにはなると
思います。

上記の内容をYはメーリングリストに以下の内容を添えて投げかけた。

9月25日の発信(学生Y)

先日、Hiromiさんからピース3に関する素敵な提案がありました！

ぱずる通信をVamos Papearの子どもたちと協働で作成するという提案ですが、素敵だと思
いませんか？

私たちは今まで、ぱずる通信の対象と目的について悩みながら活動してきましたよね。最初
は東女の学生とVamos Papearのみなさん(子どもたち、親御さん)、小学校を対象にして、
いつかは太田市の色々な方々にも読んでもらえればいいねという話し合いがされていました。
また目的に関しては、私たちの視点を通して、たくさんの人に現実を伝えていきたいというこ
とでした。これがVamos Papear の子どもたちと協働でぱずるを作成することによって、読
者の対象も広がるだろうし、小学校高学年の子どもたちや中学生が自分の力で考えて、自分
なりの意見を持つ場をつくるという意味で、目的もより具体化してくると思います。

うまく言えませんが、これこそが「協働実践」だと感じます。

Yは、この「協働実践」をすることで、これまで「ぱずる」、「ぱずる通信」が悩んできた、「誰に
向けたものなのか」、「目的は何なのか」、「自分たちが活動に関わることで、子どもたちの利益
につながっているのか」などの点に光が差すことを期待していることが読み取れる。この発信
に呼応して、早速、以下のような反応が寄せられた。

素敵な提案ですね！自分の子どもや、その知り合いが書いてるってなれば、親達も読もうっ
と思うよね。親の気持ちなんて、そんなもんです。自分の子どもに関わりがあれば、読む気にな
ると思うよ。(9月25日学生N)

皆で力を合わせることで、様々なことが変化するんですね！ それを目の当たりにして、

ちょっと感動を覚えました！　そして、そういったことに携われてる事実は、私にとって大きな喜びです……！（9月25日学生S）

反応遅くなりました！　すごいですね！太田の学生たちと一緒にぱずるが作れるなんて！まさに協同実践（協働でしたっけ？）ですね。（9月26日学生M）

ぱずる通信を子どもたちと一緒に作るというHiromiさんからの案、本当に素晴らしいと思います。共に作る過程で新たな「何か」が見えてくるのではないのでしょうか。（9月30日学生R）

ところがこうした発信が続いている中、リーダーのYが第3号での実現は少々難しいのではないかとの懸念を持ってきたようだ、と私は他のメンバーから耳にした。Vamos Papearの子どもたちはほぼ全員が小学生であるが、新たに中学生の子どもたちと知り合い、協働で「ぱずる通信」の記事を書き、なおかつ、11月13日の学園祭までに余裕を持って間に合わせること（学生研究奨励費の計画書には10月末までに発行すると記載した）は困難であると判断したのである。この判断自体、リーダーとしての冷静な判断であるともいえる。しかし、私は、内容さえ調整すれば、第3号でも実現可能であると判断した。新しい流れは風が吹いてきた瞬間を捉えなければ、立ち消えになってしまう可能性があると考えたのである。これを果たして実践における暗黙知といえるのかどうかは分からないが、ともかく、以下の通り、Yに発信した。

9月28日の発信（松尾）

ぱずる通信の件ですが、10月号で、太田の子どもたちと協働するのは困難であるとYさんは考えているとか。それは、Hiromiに投げかけてからの判断にしてはどうですか？10月9日や16日に太田へ行く可能性が高いわけだね。そのときの活動にぱずるの記事を書くというものをに入れてもらえるかもしれないでしょう。「そんな簡単に記事が書けるわけない」と思うかも知れないけど、俺はできると思うな。Hiromiもきっと「やりましょう！」と言うと思う。

結局、YはHiromiさんと調整を行い、第3号の記事「バーベキューの思い出をVamos Papearの子どもたちに聞きました」につながったのである。この記事の内容は、Hiromiさん

が構想している「自分の意見がいえること」、「リーダー的存在に成長すること」という目的からはまだまだ遠いものであるといえるだろう。しかし、まずは、子どもとの協働作業、という第一歩を標すことに意味があったと考えたい。

このように、名前を呼び合える関係、子どもとの協働作業と一定の成果が顕在化してきてはいるものの、依然として活動の課題も記事の中に見いだせる。「BBQ&保護者会に行きました」という記事の中に以下のような記述がある。

食事が終わってからVamos Papearの保護者会が始まりました。(中略)「ぱずる」とVamos Papearのかかわりを話す時間もいただきました…が、私たちの活動の目的が言えませんでした。保護者会の後「何のためにここに来ているのか」と聞かれたけど、やっぱり答えられませんでした。いつも太田に行っている次女が「太田の友達に会いに行く」と言ってるけど、それだけじゃだめなんだろうかと、これからも考えていきたいと思っています。

名前を呼び合える関係を築きつつあるとはいえ、根源的な問いである「何のために」の答えは依然として解けないパズルのままである。しかし、私自身の感覚ではあるが、「太田に行く」あるいは「太田に来る」というよりも、「太田に帰る」という表現がぴったり当たっているように思う。12月4日に訪問した直後に、私がメーリングリストで発信した一行目に、「今日、太田に帰ってきました(「帰る」という表現がぴったりの場所になっています)」と記した。すると、Hiromiさんから「お帰りなさい。(最初は、ようこそでしたが、今は違いますよね。)」という返事が届いた。こうした感覚は私だけが感じているのではなく、何人かの学生も同様な感覚を持っているようである。「ただいま」、「お帰りなさい」という関係はやはり温かい。しかし、忘れてならないのは、「ただいま」、「お帰りなさい」の関係が対称的な関係とはなっていないということである。「ただいま」は常に東京女子大学の学生から発せられ、「お帰りなさい」は常に太田の仲間たちから発せられているのが現実なのである。言い換えれば、東京女子大学のメンバーと太田のメンバーが築き始めている「私たち」というアイデンティティは、少々いびつな形で形成されているといえるだろう。けれども、Hiromiさんが11月末にこう語った。「私たちはゆっくりではあるが確実に進んでいる」。確かにその通りである。第1号のときに見られた「困っている人たちの声も届けていこう」という姿勢、視線、それはわずか9か月前のものであるのに、どこからも感じられな

くなっている。それだけ、この活動に関わる者たちのグループアイデンティティも個々のアイデンティティや役割意識も変化を遂げているのであろう。歩みは遅々としていても、確実に次の一步を踏み出す勇気と意欲を持っている限り、そこに希望はあるのだ。

4. おわりに

参加型学習という手法を取り入れた本実践が、実践共同体として機能し、学生にとって実践が、実践共同体への参加を通して得られる役割、アイデンティティの変化や過程そのものであったのか否か、実は、本来、それは短期的に判断出来るものではない。しかしながら、確かに、アイデンティティの変化の萌芽は振り返りにも行動の端々にも見受けられる。

1章で、私は、学習、教育的営みとしてのツアーの条件を以下のように提示した。

1. ひと・モノ・コトとの出会いがあること
2. 出会うひと・モノ・コトが予めすべて決められているわけではないこと
3. 問い掛け(省察)があり批判的思考能力を養う場となっていること

この観点によれば、本実践、とりわけ「ばずる通信」を巡る実践はどのように評価できるであろうか。言うまでもなく、本実践の中で、学生たちは、確実に「ひと・モノ・コト」に出会った。それは、太田在住のブラジル人(学習支援者、子どもたち、保護者)や東京女子大学の仲間、通信の読者、フェスタ・ジュニーナ会場でことばを交わした多くのブラジル人、ブラジル人家庭の温かさや独自のホスピタリティ、経済不況とそれが日本在住ブラジル人(外国籍住民)に与える影響、モノづくり(通信作り)の面白さと困難、活動目的の省察行為など枚挙にいとまがない。また、そうした出会いは、団体ツアーのように予めスケジュール化されていたわけではない。予期しない出会いが様々に押し寄せる。その出会いの中には、課題設定、課題解決を伴う「コト」も少なくなかった。それをミーティングやメーリングリストで問い掛け合い、省察し合い、活動の一つ一つを振り返っていく過程、つまり、ものごとを協働的に考え、構築していく過程で批判的思考能力を高めていった。「ばずる通信」の編集作業においても、各種活動においても、常に、「何を?」、「誰が?」、「誰に?」、「なぜ?」、「どのように?」を学生自身が判断していなければならないのである。しかし、本実践をより批判的に捉えていくとすれば、「学んでいるのは東

京女子大学の学生が中心であり、太田在住ブラジル人の子どもたちの学びにつながっているのか」という問い掛けに答える必要があるだろう。児島(2006)は、ある中学校における国際理解教育に関して触れ、「現状の『国際理解教育』の問題点は、ニューカマーの子どもたちの文化を尊重するという装いのもとで、実際には日本人の子どもたちのみを学習者として設定しているところである」(児島2006:215)と述べている。私は、本実践を本学学生に対する国際理解教育として捉えているわけではないが、第三者の目を通せば、そのように映る可能性もあるだろう。この点は学生自身も自覚しており、どのように自分たちが子どもたちに貢献できるか、こうした問い掛けが毎週のミーティングで話題として挙がっている。

最後に一言述べたいのは、私自身の変容である。教師として、研究者として、あるいは一市民としての自身の役割やアイデンティティの変化を感じている。この実践は、教師としても研究者としても、目に見える形で評価の対象になる実践とはいえない。それでも、わくわくしながらこの実践に関わっている自分がある。今回、本紀要に執筆の機会をいただき、こうした実践を「研究」という舞台に載せることにいささかの戸惑いと躊躇を感じつつ、どのように社会に還元していくことができるのかを自問自答していきたい。

(まつお しん 東京女子大学)

注

- 1.杉澤(2009)は、多文化社会コーディネーターを「言語・文化の違いを超えてすべての人が共に生きることのできる社会の実現に向けてプログラムを構築・展開・推進する専門職」(杉澤2009:20)であると定義付けている。大学教員は専門職としてのコーディネーターではないものの、私は本実践における自身の役割を「言語・文化の違いを超えてすべての人が共に生きることのできる社会の実現に向けてプログラムを構築・展開・推進する」ための促進役であると位置付けたい。
- 2.具体的には、「東女のみなさんも、様々な生きた経験をして、多文化に対して柔軟な日本語教師として育ててほしいなあと思いました」や「日本にいと日本人がホスト、外国人が受け入れられる側、という図式だけに陥りやすい傾向があると思いますが、外国人の家庭にホームステイすることによって、みごとにその図式が逆になっているのを感じうれしかったです」、「日本人もブラジルの方のように心も家もOPENにして、外国の方と交流できればいいですね」のような感想が寄せられた。
- 3.第2号の記事の中で、特徴的なのは、「交流」の視点が広がったことである。それが表れているのが、ブラジルスーパーと日本の一般のスーパーの使い分けに関し、娘さんをVamos Papearに通わせてい

るお母さんに対してインタビューした記事と読者の声の欄であろう。第1号に、ブラジル住民の声を依頼原稿の形で二人分、掲載したが、第2号では、実際に学生がインタビューするという形で取材を行った。ほんの些細な一歩ではあるが、ここに「交流」の萌芽が見て取れる。また、読者の声を掲載していくということは自己完結、自己満足ではない通信を目指していくという決意の表れであり、今後、通信発行の目的、そもそもの「ばずる」の活動の目的を考えていく上でのささやかな一歩を感じさせている。

4. 4名のうち一名は、ブラジルから来日して間もないため、ポルトガル語のみで書いてくれた。

参考文献

- フレイレ・パウロ、小沢他訳(1979).『被抑圧者の教育学』、亜紀書房。(原典:Freire, Paulo 1970 *Pedagogia do oprimido*, Paz e Terra)
- 「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会(2009).『まんが クラスメイトは外国人 多文化共生20の物語』、明石書店。
- 加藤哲夫(2002).『市民の日本語 NP0の可能性とコミュニケーション』、ひつじ市民新書。
- 児島明(2006).『ニューカマーの子どもと学校文化 日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』、勁草書房。
- レイヴ,ジーン&ウェンガー, エティエンヌ、佐伯胖訳(1993).『状況に埋め込まれた学習』、東京図書。(原著は1991年に出版, Lave & Wenger, *Situated learning : legitimate peripheral participation*, Cambridge University Press)
- 松尾慎(2010).「高等教育機関における多文化社会コーディネーターとしての教師 一群馬県太田市在住ブラジル人との交流実践より」、『多言語多文化 実践と研究』Vol. 3 東京外国語大学多言語多文化教育研究センター、pp.28-45.
- ショーン・D、柳沢・三輪監訳(2007).『省察的实践とは何か』、鳳書房。
- 杉澤経子(2009).「『多文化社会コーディネーター養成プログラム』づくりにおけるコーディネーターの省察的实践」、『多文化社会コーディネーター養成プログラム—その専門性と力量形成』、東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター、pp.6-30.
- 山西優二(2005).「参加型学習とは何か —豊かな人間関係の構築に向けて—」、『やってみよう参加型学習』、スリーエーネットワーク。

山西優二(2009).「多文化社会コーディネーターの専門性と形成の視点」、『シリーズ 多言語・多文化協働実践研究11 これがコーディネーターだ! —多文化社会におけるコーディネーターの専門性と形成の視点—』、東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター、pp.4-12.